

153 陶磁器のジャポニスム（その1）（2023年3月23日）

フランスの磁器の産地と言え、リモージュが挙げられます。ここには、世界中から集められた陶磁器を展示するアドリアン・デュブーシェ国立陶磁美術館があります。フランスで作られた陶磁器の中で、日本から影響を受けた面白いデザインのものを見つけましたので、二回に分けてご紹介します。

まず、以前にもご紹介したセルビス・ルソーです。これは、北斎漫画や浮世絵からとったモチーフをデザインした食器セットです。前回は北斎漫画からとった鶏をモチーフにした皿を紹介しました。ここでは歌川広重の浮世絵シリーズ「魚づくし」の中から、伊勢海老を写した大皿を見つけました。セルビス・ルソーは、1867年のパリ万博に出品されて評判を呼び、1930年頃まで続いた人気シリーズとなりました。



Série de poissons(Uwo-zukushi),
la langouste et les deux crevettes
par UTAGAWA Hiroshige, 19^e,
Tokyo National Museum
「魚づくし・伊勢海老、小鰓」
歌川広重 19世紀 東京国立博物館蔵
出典：Colbase (<https://colbase.nich.go.jp>)

この食器セットは、ガラス工芸家で陶磁器専門の美術商でもあったフランソワ＝ウジェーヌ・ルソー（1827-1890）が、版画家で画家のフェリックス・ブラックモン（Félix BRAQUEMOND）（1833-1914）に依頼して作らせたものです。フランス国立図書館には、ブラックモンが制作したエッチング版画による下絵が残されています（写真右下）。エッチングとは、腐食剤を使って銅板などの腐食性のある素材の表面を削ることで図柄を描き、削られた部分にインクを入れて紙に印刷をする版画技法です。印刷した紙が乾かないうちに陶器に貼り付け、窯に入れて素焼きすると、紙は焼けて陶器には図柄の跡だけが残ります。その図柄に絵付けをしてから、釉薬をかけて焼成したものです。このため、エッチング版画と原画や陶器は、図柄が左右反転しています。ブラックモンが描いた伊



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

勢海老は、左右反転させると広重の浮世絵の中にいる伊勢海老にそっくりなことがわかります。

ブラックモンは、エドゥアール・マネやエドガー・ドガといった印象派の芸術家と親交がありました。また、1867年のパリ万博後に立ち上げられた日本美術愛好家による親善団体であるジャングラールの会に参加しました。この団体は、ジャポニズムの普及に貢献しました。陶芸家、版画家、画家、美術商といった9名のメンバーが毎月セーブルに集まり、日本の着物を着て、日本食を箸で食べて、日本酒を飲む夕食会を開いていたと言います。その会合で、ブラックモンは、ルソーと知り合い、日本の意匠の食器セットを製作することになりました。

ブラックモンは、「北斎漫画」の発見者であるという逸話があります。知人の店で見た日本から送られてきた陶磁器が、北斎漫画の一部や他の浮世絵に包まれていました。ブラックモンは、その芸術的な価値に魅了されて、いち早くその価値を認めました。この話を裏付ける資料はないそうですが、北斎が描いたデザインを見事に陶器のデザインに取り入れ、「北斎漫画」の価値を高めたことは間違いないでしょう。

ブラックモンは、1872年にリモージュの陶磁製造業であるアヴィランド社(HAVILAND)と契約し、パリ近郊のオートゥイユにあった工房の美術監督を務めました。そこで制作されたものが、セルビス・パリジャン（パリ風セット）（写真下）です。日本の花鳥風月を描いたデザインですが、厚みのあるファイアンス焼（釉薬を使って彩色する陶器の一種）のセルビス・ルソーとは異なり、薄い磁器に繊細な彩色がされています。雨、海辺に生える松、木の枝に止まる鳥、笹の葉など、この美しい皿も北斎漫画からインスピレーションを受けたことが見受けられます。ただし、北斎漫画の中で描かれている橋が虹に代わり、必ずしも北斎が描いた手本をそのまま写したのではなく、ブラックモン自身による創作性が感じられます。ブラックモンが、年月を経て北斎漫画から独自のデザインを生み出していったことが伺えます。



※ 美術館の展示は、変更されている可能性があります。